

RTX Spark搭載PCが変える知財実務の未来 — クラウドからローカルへ、ガバナンスの新時代

テクノロジーの衝撃：RTX Sparkの性能

最大1200億パラメータのLLMをローカル実行

128GBユニファイドメモリと1ペタフロップAI性能により、クラウドを介さず端末内で最高峰AIモデルを動作可能。



100万トークンの巨大文脈処理

特許公報、包綴、ソースコードなどを丸ごと読み込み、一度に横断的な解析や比較を行う。

重心の移動：クラウドからローカルへ

「知財文書をクラウドへ送る前提」から「まず端末内で処理する前提」へ、実務のアーキテクチャが根本から変わる。



旧クラウド処理

知財業務プロセス別影響分析

出願準備・発明抽出



技術メモや会議記録を欄断解析し、発明の核を整理。ただし、発明者は現行法上「自然人」に限る。

先行技術調査・FTO



長大な公報や製品仕様を同一文脈で比較し、請求項ごとの差分整理を劇的に高速化。

権利行使・侵害警告



ソースコードと特許請求項を英合し、クレームチャートの初稿を迅速に生成。人手による最終レビューが必須。

証拠保全・訴訟対応



証拠束をローカルで要約・タグ付け。プロンプトや出力履歴自体がESI（電子保存情報）として証拠対象。

入力資料

明細書・OA・契約書

ソースコード・技術仕様

社内秘密ノウハウ

AI処理 (RTX Spark上)

ローカルLLM/エージェント

ローカルRAG/索引構築

クラウド迷信の要否判断

出力・管理

草案生成 (要約・比較・抽出)

ログ・監査・モデル版管理

証拠保全・法的ホールド

変化するリスクとガバナンス

クラウド送信リスクから「端末統治リスク」へ

キャッシュ RAGインデックス 実行履歴
端末内のキャッシュ、RAGインデックス、実行履歴が営業秘密管理やe-discoveryの新たな対象。

「人間の寄与」の説明責任

日本の知財高裁 (2025年1月) や米露の判例に基づき、AIによる案出でも人間の実質的寄与の記録 (プロンプト等) の保持が重要。



3つの最重要結論

- 高感度ワークフローのローカル優先設計、
- 法務・知財・情シス共同の端末ガバナンス、
- 統制可能性 (モデル由来の透明性等) による導入判断。

実務実装チェックリスト (優先順位別)

【短期】基盤の構築

利用モデルのホワイトリスト化、データ分類 (入力禁止・条件付・自由) の再設計、エージェント権限の最小化。

【中期】運用の高度化

知財専用ベンチマークによる精度評価、ローカルとクラウドの差分テスト、法的ホールド手順の整備。

【長期】信頼性の確立

C2PAを用いた生成コンテンツの由来情報埋め込み、退職・案件終了時の索引消去の標準化。